

まんだら通信

第220号 (通巻255号)

平成26年10月 西暦2014年 佛暦2580年 皇紀2674年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



日本の、本当の評判

朝日新聞は「大東亜戦争の時、日本軍は朝鮮半島で娘達二万人余りを強制的にかり集めて売春婦として前線に送り、奴隷のように辱めた。」と、詐欺師まがいの吉田清治という人が書いた本を鵜呑みにして、自分で取材もせず何回も書きました。

先月朝日新聞は、記者会見でやっと「あれは間違いでした」と撤回して取り消しました。その間に、この『日本軍の従軍慰安婦』という間違った記事が世界中が信じ込み、そのために、日本の誇りと名誉を傷つけた罪は計り知れません。

十月十一日号の『週刊現代』が、この問題を特集していますが、「安倍内閣という危険な右翼政権が、産経新聞と一緒に朝日新聞を叩いているが、このままでは日本は世界から見放されるだろう。」と、ニューヨーク市立大学名誉教授の、霍見芳浩氏や各国の特派員が言っているという記事を載せています。

私から見れば、当時の政府や軍隊が記録した、間違いのない資料が沢山あって、自分で調べれば朝日新聞の記事が大うそだということにすぐに分かることです。恥じなければならぬのは、自分の無知を棚に上げてご高説を垂れる、この学者や特派員たちの方です。

朝日新聞に日本人の良心があるなら、ハッキリと謝罪すべきですが、すぐにでもしなければならぬことは、アメリカやイギリス、フランス、ドイツなど世界の大きな新聞に「今までの記事は間違いでした。」と詫びて、それぞれの国語で、その国の大きな新聞に全面広告を出すことです。

では、日本軍が攻め込んで戦場になったインドシナ半島、マレーシアやインドネシアの人たちは、今でも日本を恨んでいるのでしょうか。

土地の人たちがどのように思っているかということは、公式な記録になりにくいので、私たちが目にするのは殆どありません。

『おんな一人玉砕の島を行く』(笹幸恵、文芸春秋) 『日本が戦つてくれて感謝しています』(井上和彦、産経新聞出版) や、または、戦跡慰霊団や遺骨収集団が嘗ての戦場を訪問した時、現地の人たちと交わした言葉が僅かに残っています。

それらを読むと日本人の多くが思っている「世界に迷惑をかけながら、謝りもしない日本」とは、どうも違うらしい。寧ろ、長い間痛めつけられた白人を追い出してくれた日本、という感謝の気持ちの方が強いことが分かります。

インド東北の、ミャンマー(ビルマ)との国境近くにインパールという町があります。

この町を攻略するために、インドの国民的英雄スバス・チャンドラ・ボースを司令官とする『インド国民軍』五千〜一万五千人を加えた十万人近くの日本軍が参加した『インパール作戦』があります。大東亜戦争の中で、最も無謀な作戦として語り継がれている、負け戦として有名ですね。

けれども、インド人から見ると、この戦いは『インパール戦争』と呼んで、侵略者イギリスからインド独立するための大事ななきっかけだった、のだそうです。日本軍は侵略者ではなく、独立を助けた解放軍でした。

治安の関係からだと思えますが、日本人がこの土地を訪ねたのは、戦後半世紀が過ぎてからでした。

ここで聞いた、土地の人たちの話は信じられないことばかりでした。

インパール近くのマパオという村には、土地の女性が作った美しいメロデーの『日本兵士を讃える歌』が今も歌い継がれているとか。大激戦地の一つ、マニプル州のグルモハン・シンさんは「日本の兵隊さんは命を張って私たちが戦場から逃がし、戦つてくれました。今こうして私たちが生きていられるのも、みんな日本の兵隊さんのおかげだと思つて感謝の気持ちでいっぱいになります。一生この気持ちは忘れることは出来ません。」と言ってくれました。

近くの村のロトパチン村には、土地の人たちが

が建てた日本兵の慰霊塔があり、毎年、供養が行われているそうです。

村長のモヘンドロ・シンハさんは「日本の兵隊さんは飢えの中でも実に勇敢に戦い、村のあちこちで壮絶な戦死を遂げました。」

この勇ましい行動のすべては、みんなインド独立のための戦いだったので、私たちがこの記憶を若い世代に残すため、慰霊塔を建て独立インドのシンボルとしたのです。」

同じような話は、他にも数多くあります。

ジャワ海の海戦で日本海軍に撃沈され、油まみれで二十時間余りも海上に漂っていたイギリスの軍人四百五十人を、潜水艦の攻撃という危険を顧みず救助し衣食を与え、送り返した駆逐艦『雷』の工藤艦長のことや、今のパラオ共和国のペリリュー島で、米軍上陸の前に島民すべてを安全な島に退避させ、敵に大きな損害を与えたのち玉砕した、守備隊長中川男大佐の話など、土地の人たちは語り伝えているのに、肝心の私たちが知らないことは、この他にも沢

にっぽん人情小噺 落語家 三遊亭鳳豊 第一〇五話 手紙

お母さんが亡くなって三年、去年三回忌を終えた和江さんは、一年ぶりに故郷、長崎の福江島の実家に里帰りをしました。雨上がりの海の寄せては返す静かな波の音が、彼女を迎えてくれました。

里帰りと言っても、母がいなくなれば、実家には誰もいません。和江さんは、物心ついた時には、父親はいませんでした。彼女が生まれてすぐ結核で亡くなったからです。

和江さんは、小学校の先生だった母親に、女手ひとつで育てられたのでした。もちろん、子供心に淋しい思いをしたこともありましたが、和江さんも小学生の頃から、食事や早朝の農作業など、母の手伝いをしながら、一生懸命、勉学につとめました。

やがて、和江さんは長崎市の県立高校を卒業し、福岡の銀行に就職。母親のもとを離れ

ました。そして、縁あって、福岡で結婚。ふたりの子供に恵まれ、いまは孫が四人。六十五歳の、いいおばあちゃんになりました。

その一方、お母さんは九十歳で亡くなるまで、ひとりり島で暮らしていました。和江さんは何度も、福岡で一緒に暮らそうと母親に言いましたが、お母さんは首を縦に振りません。「そして、あなたが帰る家なくなるけん……」、それが母親の口癖でした。女にとつて、いざとなつたときに泣いて帰れる家があるかないかは、大きなちがいだ。そのために、ひとりり島でがんばると言つて、聞かなかつたそうです。

「泣いて帰ることなんか、ないさ」「いや、わからんよ」その繰り返しでした。そんな母親が亡くなり、今年、子供の頃に住んでいた実家の整理のために戻つたのです。「お母さん、ただいま！」和江さんは、まるで少女時代に返つたように、大きな声を出し、家に入つていききました。窓からは、あたたかい日差しがちよつと古くなつた畳の上に注がれていました。

和江さんは、窓を開け放ち、空気を入れ替えました。久しぶりに風が家を巡り過ぎていききました。「さあ、何から整理をしましょうかね。お母さん、捨てるの、大嫌いだったから、一杯いろいろあるんじゃないかな」。独り言を旨いながら、押入れをあけた瞬間、大きな紙の袋がドサツと目の前に落ちてきました。それはまるで、和江さんが来るのを待つていたかのようでした。(あれ、なんだろ、これ)。和江さんが中から取り出したものは、大量の手紙の束でした。(うわー、すごい量。へえ、全部、とつてたんだわ。え、これ、私が出した手紙！)

和江さんが島を離れて、長崎市内の高校に通つていた頃、お母さんに出した手紙。福岡に行つたばかりで不安な気持ちを書かれた手紙……。娘時代に急に戻つたようでした。

そうしたなかに、三通の手紙が、いっしょに輪ゴムでとめられた手紙がありました。

なんで、これ、輪ゴムで止めてあるんだろ(う？)。和江さんは、輪ゴムをはずしました。もちろん、母親宛の手紙です。一つ目の封筒

の差出人は、母親の妹のご主人からでした。

「拝復 貴女様のご意見、お手紙にてよくわかりましたが、私は貴女からご注意を受けるようなことをしているつもりはございませんし、これ以上、私共の家庭に干渉するのであれば、希美子との離婚も考えております。幸い、子供もおりません。ある意味、病弱で、役に立たない妻と離婚するいい機会だと思つています……」(ああ、京都の良吉おじさんからの手紙だわ。へえ、怒っているわ)

和江さんは、二通目の手紙の封筒の中身を確認しました。それは、良吉おじさんの妻であり、母の妹である希美子おばさんから宛てた手紙でした。そこには、和江さんのことも書いてありました。

「姉さん、勝手なことばかり書いて申し訳ありません。以前からお願ひしていた和江ちゃんのことをよろしくお願ひします。このままでは、わが家は崩壊してしまいます。ぜひ、和江ちゃんをわが家に寄越してください。伏してお願ひ申し上げます。和江ちゃんの将来の旦那様になる方もすでに了解済みです。京都大学の医学部で学ばれ、インターンをされています。お見合ひしたいと先方のご両親からもご連絡をいただいています。ぜひ、お願ひですから、和江ちゃんに、京都に来てくれるように頼んでください。きつと、和江ちゃんを幸せにします。お願ひです」そして、三通目が和江さんが京都から母親に宛てた近況報告でした。おばさんたちの夫婦げんかがひどいので、九州に戻りたいと書かれていました。

和江さんは、思い出しました。お母さんから頼まれて、銀行を辞め、京都の病氣のおばのところに、亡くなるまで一年ほど介護に行つたことを。そして、出発寸前、付き合つていた男性から「京都に行く前に、婚約してくれ」と迫られ、それほど言うならとプロポーズを受けたこと。

そして、何より、おばの介護で疲れていた自分に優しくしてくれたインターンの医学生がいたことを。和江さん、二十三歳の春でした。(え、あの学生さんが手紙に書いてあつた私の将

来の旦那様だったの?)

ふと、和江さんの脳裏に、若き日の白衣の男性の姿が浮かび、心がときめきました。

背が高く、すがすがしい目をした、いかにも聡明そうな若者でした。一度、食事に誘われた時、自分から「私、婚約者がいます」と言つたことも思い出されました。おばが亡くなつてからは、その方からは何も連絡はありませんでした。京都に行くなら、婚約してくれと言つた人は、いまのご主人。でも、あの夜、プロポーズを受けていなかったら……。

(ああ、そうだったのか。私がいまの主人との結婚話をしたとき、母が理由も言わず、猛反対したのは、そのせいだったのか。早く言つてくれたらよかったのに……)

和江さんは、おばさんが母に宛てた手紙を手にしたまま、二十三歳の時の自分を思い出していました。

(お母さんは、娘の結婚に反対したわけをいつか娘にわかしてもらおうと、こうして三つの手紙をいっしょにゴムでとめておいたのだわ)

そして、和江さんは自分が一番美しかった頃をしみじみと思い出すのでした。

(お母さん、ありがとうございます)
和江さんの瞳から涙があふれ、頬を伝わつていきました。いま、和江さんは、泣いて実家のお母さんのところに戻つてきたのでした。

MOKU出版と著者の三遊亭鳳豊師匠のご好意で、今月も転載させて頂きました。

先月号の『土俵際』で取り上げた『土佐豊』(十両四枚目)は健闘むなしく、惜しくも六勝九敗で負け越しました。

番付後退はやむを得ないでしょうが、しっかりと稽古に励んで捲土重来、来場所頑張つて、番付を上げてもらいたいと思います。

少しずついざる景色や 翳雲
いつの間にか日脚が短くなって、それと分かるほど夕暮れが早くなりました。お元氣にお過ごしでしょうか。▼普段は徒歩通行しか出来ない眼鏡橋。今年には特別の計らいで、八幡神社の祭りに行く前に、下立松原神社のお神輿が渡りました。あとにも先にも1回だけの計らいです。▼インパール。記事にあるように日本をべた褒めですが、本当にその通りなのか、自分の目で確かめたいと去年から思っています。今年は事情が許さず行けませんが、まだ80歳。旅費を貯めて、いつか望みをかなえたいと思っています。▼ドイツ在住の、川口マーン恵美さんのお話。
あるドイツ人夫婦がポーランド

余滴

アワダチソウ【キク科アキノキリンソウ属】です。

休耕地などに我が物顔にはびこり、どちらかといえば、良くない印象を持たれがちなの野草。先入観なしに見ると、鮮やかな黄色が捨て難いと思いませんか。

それもその筈、明治時代に、北アメリカから切り花用として持ち込まれた、園芸植物だそうです。

日本では代萩と呼ばれ萩の代用として用いられ、その茎はすだれの代用として用いられたそうです。また、寒くなる前の蜜源として、ニホンミツバチの越冬用に大変貴重な植物でもあります。 2014.10.09 龍涉



